

子供の行動には必ず理由（わけ）がある

教師になって一年目。厳しく子供を指導できるようになってこそ、一人前であると思っていました。それは、教育実習中に「教生先生(教育実習生)と教師の違いは、学級経営にある。教師は、自分の学級をもちその学級を自分の教育観で経営している。教育実習生は、その教室の経営力の下、授業をしている。教師になったら、自己を磨き、学級をきちんと経営できる人になりなさい。そのためには、指導者として理由があれば厳しく指導できないとだめだ。」と言われたからです。しかし、二年目のある日、偶然目撃した学年主任の行動から、その考えを大きく見直すことになりました。

A君は、友達に乱暴な行動をすることがありました。その日も、彼が原因で友達が傷つき苦しんでいました。その場にいた学年主任は、乱暴な行動を繰り返している彼に対して厳しく指導すると思ったその瞬間、険しい顔で全身に力を入れて学年主任と対峙していた彼を、そっと優しく抱きしめたのです。私は、驚いて目を見開きました。すると、A君の体から力が抜けていくのがはっきりと分かりました。

後日、A君との場面を話題にしたとき、学年主任は「乱暴な行為そのものは厳しく指導しても、その子は受け入れないといけない。人の行動には必ず理由がある。繰り返してしまう理由を、時には誰かが理解してやろうとすることで彼は救われる。」と言われました。

厳しく指導することだけが、学級経営の道筋であると勘違いしていた自分に気付いた瞬間でした。その後、たとえ行為を厳しく指導しても、その子供を理解し受け入れるように心掛けたことは、言うまでもありません。